

涙をこらえ別れの言葉を述べる児童



学校長と児童代表による校旗返納



校区民ら約 250 人が出席



幣串小学校のあゆみを紹介



閉校記念碑の除幕を行う関係者



思い出を語る会で「幣串ソーラン」を披露する子どもたち

幣串小学校閉校式 108年の 歴史に終止符

今年の3月末閉校する幣串小学校（坂元英透校長）の閉校式が2月10日、同校で開催されました。

この日会場には、校区民や同校卒業生、同校に勤務していた教職員ら約250人が出席し、地域と共に過ごした108年の歴史を振り返り、別れを惜しまました。

式辞で坂元校長は「明治36年2月に片側小学校幣串分教場がスタートした。108年の歴史が途絶えるのは悲しいが、今後も地域住民が一体となり、新しい幣串の姿に期待したい」とエールを送りました。

全校児童の10人は、別れの言葉を分担して発表。1222番目で、今年最後の卒業生となる荒田桃子さんは「閉校し寂しくなるが、私たちには幣串小の思い出がたくさんあります。これからも精いっぱい頑張るので、幣串の強い絆で見守って支えてほしい」と涙をこらえながら述べました。

幣串小学校のあゆみでは、学校と地域住民が持ち寄った幣串の古き時代の写真が説明とともに上映され、出席者らは懐かしんで見入っていました。

式典終了後、同校運動場内に設置された記念碑の除幕が行われたほか、思い出を語る会では、児童と中学生が「幣串ソーラン」の踊りを披露し、幣串小への強い思いを表現しました。

同地区出身で出水市に住む濱清吾さん（61歳）は「島外にいるが幣串は最高の故郷。学校はなくなるが、いこいの場所になってほしい」と学校跡地の活用に期待しました。